

スピーカーアキュライザーの導入(12)

—古典調律音源—

1. 始めに

前報(11)に引き続き、スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴を実施します。

2. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴方法

スピーカーアキュライザーSPA-7の設定条件は前報(2)に述べたとおりとしますが、前報(11)でケーブルの接続方法を替えた後、古典調律の音源を試聴してみます。

インフラノイズは、以前にケーブル開発に際し、ケーブルの評価の際、「純正律で演奏された録音を用いて聞き比べた時に演奏の内容や音質の好みの違いなどの違いで判断が左右されることなくケーブルの再生能力の優秀性が確認できる。」と主張されていまいました。すなわち、ケーブルは、音律が正確に再現されることを損なってはいけないとのこと。このような音律、さらには音階の正確な再生は、ケーブルのみならず、オーディオ機器全般に要求されることと思われま

そこで、スピーカーアキュライザーの試聴として、平均律だけではなく古典調律の音源を聴いてみることにしました。

オルガン曲では、次のCDを聴いてみます。

ミントーン：**Bach auch Silberman Orgeln II**

プレトリウスの中全音律の改良版：塚谷水無子 **ORGANWORKS II**

チェンバロ曲では、次のCDを聴いてみます。

ラモアのミントーン：中田聖子

愛の神殿—ルドウーテのためのチェンバロアルバム

ピアノ曲では、次のCDを聴いてみます。

ミントーン：稲岡千架 **Mozart Fantasy & Sonatas**

稲岡千架 **Mozart Variations & Sonatas**

キルンベルガー第2法：後藤友香理 古典調律の世界

さらに、民族音楽として不協和の多重合唱のブルガリアンポリフォニーのアンジェリーテのブルガリアンヴォイスのCDも聴いてみました。

3. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴結果

オルガンのCDはEMT981で再生しました。**Bach auch Silberman Orgeln II**は、Baselに訪れた際、Silbermanのオルガンのある教会を見学し、Basel大学の先生から頂いたCDで、ミントーンで調律されていて非常に澄んだ音がします。

ORGANWORKS II は、故村井裕弥氏を偲ぶ会で面識を得た塚谷水無子さんによるシュニットガーのオルガンの演奏で、かつてヘルムート・ヴァルヒャも弾いたオルガンだそうで、ヴァルヒャのアナログ盤と同様、壮大な音がします。これらのオルガン曲を比較して試聴しますと、両者の音の違いがよく分かります。なお、地元の多目的ホールのオルガンは、平均律、ピッチ 440Hz で調律されているとのことです。

愛の神殿-ルドゥーテのためのチェンバロアルバムはリッピングして、fidata HFAS1-S10 のミュージックサーバーから Brooklyn DAC+ に送り出して再生しました。使用されているチェンバロは、久保田チェンバロ工房製、ピッチは 415Hz、調律はラモアのミーントーンと記載されており、ラモアのミーントーンは、ミーントーンから純正律の方向に修正をかけているものらしいです。低めのピッチでラモアのミーントーンは純正律に近づけていますので、澄んだチェンバロの繊細な音が聴けます。先日もこの奏者によるラモアやクープランの曲の演奏を聴いてきましたが、同様にピッチは 415Hz、調律はラモアのミーントーンでした。この奏者は、曲によってヴァロットティ律やヤング律も選択しています。

3 枚のピアノ曲の CD はリッピングして、fidata HFAS1-S10 のミュージックサーバーから Brooklyn DAC+ に送り出して再生します。モーツアルトのピアノ曲は、ミーントーンで調律されたベヒシュタインで演奏された演奏が収録されています。ベヒシュタインの音にミーントーンの調律がマッチして優雅なモーツアルトが聴けます。古典調律の世界の CD は、キルンベルガー第 2 法と平均律で調律されたスタンウェイで演奏されたピアノ曲が収録されています。同じ曲を両方の調律で聴くこともできますが、キルンベルガー第 2 法の方が音の彫りが深く、平均律の方が平面的な感じがして、両者の違いが以前よりよく分かるようになっていきます。

演奏会で求めてきた、民族音楽の不協和の多重合唱のブルガリアンポリフォニーのアンジェリーテのブルガリアンヴォイスの CD は、EMT981 で再生しましたが、演奏会の印象そのままに不協和の各パートが濁らずに分離して聴けました。

その他古楽の音源は数多くあるのですが、音律やピッチが記載されていない場合でも、絶対音感のない当方においても、スピーカーアキュライザーが加わったことにより、これまで以上に、古楽の音源の再生にも秀でてきたことが感じられ、上記のような同じ曲での古典調律と平均律の違いなどは明確に認識できました。

以上のように古典調律のバロックやルネサンス音楽の再生が正確であれば、結果としてジャズのブルーノートにも有効であろうことが推測できます。

スピーカーアキュライザーは、ケーブルの設計における音律の再生などの経験も踏まえ、結果として種々の音楽ソースに的確に対応できるように設計、調整されたものと思われまます。

なお、あまり馴染みのない音律についての解説を、理解が行き届いていませんが、下記に示しておきます。

プレトリウスの中全音律の改良版

<http://murashin.sakura.ne.jp/muraron12.htm>

ラモアのミントーン

<http://murashin.sakura.ne.jp/muraron16.htm>

キルンベルガーの調律法

<http://murashin.sakura.ne.jp/muraron18.htm>

また、上記のインフラノイズのケーブル開発の経緯や関連する実験結果およびピタゴラス音律、純正律、ミントーン、平均律の音律間の音階での音のずれなどは、オーディオ論壇の下記資料に示しています。

[音律等の再生能力による再生装置の評価方法についての実験と考察](#)

4. まとめ

スピーカーアキュライザーSPA-7 の導入後、古典調律の音源を試聴した結果、上記のケーブルの設計以降の経験が、その再生音に反映されていることが分りました。

以上